

May 3, 1999

## 高齢者のボランティア活動（その1） フォスター・グランドペアレント・プログラム

JETRO New York, Health and Welfare Dept.

Director 伊原和人

Research assistant 天池麻由美

医療、年金、介護といった社会保障の面ではやや見劣りのするアメリカであるが、ボランティア活動が盛んなことにかけては世界一かもしれない。中でも、時間的なゆとりがある高齢者の活動は、大変活発で、1991年に実施された Marriott Senior Volunteer Study によれば、60歳以上の高齢者の約41%が過去1年間に何らかのボランティア活動に参加しており、その平均活動日数は64日（約1週間に1日強）、1日当たりの平均活動時間は3.6時間にも上っている。

その背景の一つとして、連邦、州、非営利組織など各方面、各レベルで、様々な形の高齢者のボランティアを促進するプログラムが実施されているという事情がある（以前、レポートした介護オンブズマン・プログラムもその一つ）。

こうしたプログラムは、他者への無償の援助という側面を強調するものから、日本のシルバー人材センターのような一種の雇用対策的な性格のものまで広範に及んでいるが、いずれも、高齢者の時間、能力、経験などを地域社会で活かすとともに、高齢者自身がボランティア活動を通じて、プロダクティブな生活スタイルを維持し、その生活の質（Quality of Life）を向上させることを狙いとしている。

高齢社会の到来とともに、日米両国とも、職業生活引退後の高齢者の生活モデルが模索されているという事情に変わりはないが、高齢者の能力や経験を活かし、「プロダクティブ」な生き方を促すという面では、アメリカの方に一日の長がありそうである。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 高齢期においてなおプロダクティブに生きるという思想は、米国では「プロダクティブ・エイジング」や「サクセスフル・エイジング」などという言葉で表現され、老年学関係の書籍のみならず、一般のマスメディアでもしばしば目にする。

これに対して、昨年来、日本で流行語となっている赤瀬川原平氏の「老人力」は、加齢に伴う記憶や身体機能の衰えを、逆手にとって、プラスの「力」として捉え、強迫的なまでに「生産的」であることを良しとする価値観に対して異議を唱えている。老いの受容という「諦観」を超越して、これを「力」に転化してしまった赤瀬川氏自身の着眼には正直、驚かされたが、読み進むうちに引き込まれてしまうから不思議な本である。赤瀬川氏自身も書いておられるように、こうした「老人力」を、前向き、生産的であることを絶対的に正しいと信じるアメリカの人々に説明するのは難しいような気がする。

しかし、これまで何人かのアメリカの高齢ボランティアを取材していて感じたことは、いず

前回、データから見たアメリカの高齢者の状況を概観したが、今回以降、数回にわたって、こうしたアメリカの高齢者のアクティブな生き方について、ボランティア活動の現場などの取材を基にレポートしたい。その第一回は、フォスター・グランドペアレント・プログラム (Foster Grandparent Program) である。

## 1 プログラムの概要 特別な支援を必要とする子供たちが対象

フォスター・グランドペアレント・プログラムとは、ボランティアの高齢者が、虐待等のいじめによって情緒不安気味の子供に対しサポートを行ったり、文盲の子供に対し文字を教えたり、あるいは素行不良な少年や未成年で母親となった少女の相談相手となるといった、特別な支援を必要とする子供たちを対象としたプログラムである。

同プログラムは、ボランティア・サービス法 (Domestic Volunteer Service Act) に基づいて、連邦政府の補助金を受け、高齢者のボランティア・プログラム「National Senior Service Corps Programs」(連邦政府の特殊法人の一つである Corporation for National Service が運営) の一つとして実施されている<sup>2</sup>。具体的には Corporation for National Service が各地域の実施主体 (地方自治体や非営利団体) に対し、事業費の一部を補助し、各実施主体が、活動の拠点となる保育所、学校、病院、福祉施設等と連携して事業を行っている。

今日、ボランティア対策として位置づけられているが、元来は、低所得の高齢者の雇用対策としてスタートした (1965 年) ものであり、今日なお、プログラムの参加者は一定の所得以下であることが条件とされ、同時に、活動参加者は若干ながら stipend と呼ばれる報酬が支給されている。

(参加条件)

- ・ 60 歳以上であること。
- ・ 週に 20 時間 (1 日 4 時間、週 5 日間) 活動に参加できること。
- ・ 一定所得水準以下であること (ニューヨーク州の場合、単身者：月 906 ドル以下、夫婦二人暮らしの場合：月 1,221 ドル以下)

なお、以上の条件のほか、各実施主体によって、個別に条件が課せられることがあり、筆者が訪問したニューヨーク市の場合には、下記の条件を満たすことが必要となっていた。

---

れも肩肘を張らずに、マイペースで、自分のできることをしていこうという「自然体」(英語で言えば、Take it easy) を基本に活動を続けていることである。何歳になろうとも、社会や隣人と関わり、何らかの役に立ちたい、人に認められたいという思いは万国共通しているようにも思われ、米国の「プロダクティブ・エイジング」と日本の「老人力」は、実は相矛盾する概念ではないのかもしれない。

<sup>2</sup> National Senior Service Corps Programs は、フォスター・グランドペアレント・プログラムのほか、Retired and Senior Volunteer Program (地域貢献プログラム)、Senior Companion Program (要援助の高齢者を対象としたプログラム) の 3 つからなる。

- ・健康であること（プログラム参加前に健康診断を受けることが義務づけられているほか、活動中は1年に1度、定期的に健康診断を受けることが必要）
- ・犯罪歴がないこと（驚いたことに参加者は、指紋採取が義務づけられており、採取された指紋はニューヨーク市警が保有している前科データと照合される）（報酬など）

フォスター・ペアレント・プログラムに参加した高齢者に対しては、1時間につき2ドル55セントの stipend と呼ばれる報酬が支払われる。なお、これは給与ではなく（実際、最低賃金を下回っている）活動に伴って失われた機会費用の実費補填としての位置づけがなされているとのことであり非課税扱いとなっている。また、この報酬を受け取っているからといって、公的年金の支給額が減額されることもない。さらに、交通費（実費）が支給される。<sup>3</sup>

このほか、活動中の事故に備えて傷害保険が提供されている。

## 2 保育所での活動の実際 「祖母」のように子供を愛し、言葉を掛け、励まし、見守る

筆者が訪問したのは、ブルックリンにある New York City Technical College 内の Our Children Center（デイケアセンター：保育所）。案内して下さったのは、ニューヨーク市の高齢者対策部でフォスター・ペアレント・プログラムの担当責任者である Elease Gant さんである。

このデイケアセンターでは、親が大学で授業を受けている間（米国では高校を卒業して一度就労した後、大学に入り直し、専門知識を身につける者が多い）子供を預かっており、現在125人が保育サービスを受けている。現在、20人のシニア・ボランティアがフォスター・ペアレントとして活動に参加している。

ちょうどその日は、Multi Cultural Day と銘打ったイベントが開催されており、教室では子供たちがそれぞれ世界各地の衣装をまとって、リズムカルな音楽に乗って踊りに興じていた。その中で子供たちに負けず盛り上がっていたのは、「NYC Foster Grandparents」のロゴの入った赤いジャケットを着たフォスター・ペアレントのおばあさん達であった。

その一人が、活動歴6年の Josephine Ozchowzski さん（82歳）。子供のみならずスタッフからも Grandma Chickie（グランマ・チッキー）と呼ばれている。ギアントさんの話によれば最初、オチョウスキさんがこのプログラムに参加するために市役所にインタビューに訪れた際には、たいへんな恥ずかしがり屋で、オドオドした様子だったという。この活動を続ける中で、すっかり別人のように活発になり、明るい表情になったそうだ。

オチョウスキさんは、夫に先立たれ、現在は娘夫婦とその孫と暮らしている。

<sup>3</sup> このほか、活動場所（施設）によっては、ランチやコーヒーなどが提供される。

彼女にどうしてこの活動を続けているのかと尋ねたところ、「楽しいから」という返事が返ってきた。

オチョウスキィさんもそうだが、フォスター・ペアレントの方々は、一見して、その年齢に比べ、大変若々しい印象を受ける。ギヤントさんによると、必ずしも元来、健康で元気な人ばかりが参加しているというのではなく、この活動を続けていくうちに参加者が次第に若返っていく感じがするという。

デイケアセンターの保母さんの仕事は、子供を訓練し、保育することであるが、フォスター・ペアレントの役割は、職業人の保母とは違い、まさに「祖母」のように子供を愛し、言葉を掛け、励まし、見守ることという。したがって、デイケアセンターのフォスター・ペアレントは、それぞれが、言葉が遅かったり、歩行が困難であったり、情緒が不安定であるといった問題を持っている子を担当し、その子を中心に他の子供たちとも関わっている。

Multi Cultural Day のパレードの中で、4 歳くらいの男の子の手を引いていたのは、Dorothy Robinson さん（81 歳）。表情の乏しい、うつむき加減なその子にやさしく声を掛けながら、ゆっくり歩を進めている。ロビンソンさんの活動歴は 12 年。現役時代はウォール街で働いていたが、退職後、ラジオでこの活動の存在を知り、参加した。「家にいても時間を持て余すので、何らかの形で外に出たかった」とのこと。

デイケアセンターの子供たちはロビンソンさんにとってはひ孫の世代に当たる。ロビンソンさんに活発な子供たちを相手に疲れぬのかと聞いたところ、笑いながら「正直言うと、時には家に帰ってベッドに直行することもある。」という。

ギヤントさんの下で、ブルックリン地区を担当する Caroldine Smith さんによれば、高齢者がフォスター・ペアレント・プログラムに参加する最大の動機は、自分が何かの形で社会と関わってゆきたい、自分の住む地域に貢献したいという思いとのことである。参加者には 1 時間 2 ドル 55 セント（週 51 ドル）の報酬が支給されるが、この報酬はこうした純粋な気持ちを具体的な行動に変えるちょっとしたインセンティブに過ぎないとのこと。

また、このプログラムに参加する高齢者は、活動を通じて、自分と同世代の新たな友人を得ることができるのも大きなメリットという。ここで知り合った友人達と電話を掛けあい、食事を共にし、互いの健康を祈り合うといった交流を行っている。

ブルックリン地区では、1 月に 1 回、それぞれの活動場所でフォスター・ペアレントが集い、誕生会など行い、参加者同士で交流の場を持っている。また、2 月に 1 度は、地区ごとに研修会が行われ、各種セミナーが開催されている。さらに、年に一度、“Recognition Day” と呼ばれる感謝の集いが市内のホテルで開かれ、市長始め関係者が出席し、フォスター・ペアレントの人々の日頃の労をねぎらうとのことである。

フォスター・ペアレントが活躍する場は、ニューヨーク市全体で約 50 箇所。保育所のほか、病院、学校、さらには、未婚の母達が共同生活を営むグループホームなど多様である。活動の場は多様であるが、活動の基本は、子供たちの「祖父母」としての役割を担うことである。例えば、10 代で母親となった少女達が暮らすグループホームでは、少女達が学校に通っている間は、赤ちゃんの世話をし、少女達が帰ってくると、彼女たちに育児のノウハウのみならず、母親としての心得を教えるといった具合である。

ニューヨーク市内で、このフォスター・ペアレント・プログラムに参加している高齢者は、全部で 250 人。女性が 9 割以上を占め、男性はわずか 23 人とのこと。情緒不安定なティーンの子のためにも男性の参加者がもっと欲しいとギャントさんは打ち明ける。平均年齢は 75 歳、最高齢は何と 89 歳。10 年以上続けているベテランも多く、中には 20 年選手もいるとか。男性の参加者のほか、学校で子供たちに勉強を教えられる教育水準の高い高齢者の参加が欲しいともいう。

低所得の高齢者は多数いるのに、ニューヨーク市全体で 250 人とは少ないのではと尋ねると、スミスさん曰く「週 5 日、1 日 4 時間というハードルは高いし、また、公的年金が少ない人は、SSI(Supplemental Security Income)と呼ばれる生活保護が受けられるから、あえてこのプログラムにトライしようとならない高齢者も多い」という。

取材を終えて、マンハッタンのギャントさんのオフィスに戻る道すがら、「(ギャントさん自身)リタイアした後はどうする予定ですか?」と尋ねたところ、「生まれ故郷のサウスカロライナに戻って、元気がある限りボランティアをしながら暮らしていくわ。」とのこと。人や地域に尽くすというのは、アメリカ人の生きがいの一つのようである。